

第6回北方地域社会 ( RINC ) フォーラム実施報告：  
宿泊の進化から考える『まちの当事者』は誰か？

Report on the 6th Northern Regional Community (RINC) Forum:  
"The Person Concerned of the Town" Thinks about Somebody  
from Evolution of the Staying

道尾 淳子\* 木村 尚仁\*\* 梶谷 崇\*\*\* 谷口 尚弘† 碓山 恵子\*\*\*  
濱谷 雅弘\*\*\* 小谷 彰宏\* 坂井 俊文\*\*\* 塚越 久美子†† 坂東 勉††† 伊東 佳美†††

Junko MICHIO, Naohito KIMURA, Takashi KAJIYA, Naohiro TANIGUCHI, Keiko IKARIYAMA, Masahiro HAMAYA, KOTANI, Toshifumi SAKAI, Kumiko TSUKAGOSHI, Tsutomu BANDO and Yoshimi ITOH

概要

本稿は、2020年2月10日(月)16時30分～19時00分(150分間)、本学において開催した第6回北方地域社会フォーラム「宿泊の進化から考える『まちの当事者』は誰か？」の実施報告である。今回は「まちの当事者」をキーワードに開催した。現代の宿泊施設の中には、昨今のまちの価値を惜しむに終わらせず、多数の人々を巻き込みながら、まちの一体感と役割連携で価値創造を行おうとするチャレンジがみられる。「共感・協育～当事者になる、当事者を巻き込む～」をテーマとして、実践者よりそのことを学び、まちの何らかの価値に誰でも当事者意識を表すことのできる仕掛けについて考える。

1. はじめに

「北方地域社会フォーラム」とは、北方地域社会研究所(通称RINC)が2015年の設立以来、年に1～2回開催するもので、産官学の関係者のみならず一般市民の方々も加わって、地域社会の先駆的な事例に学び、私たちが住まう北方圏の地域社会の発展に向けた議論と情報共有を行う場である。第6回目は「まちの当事者」をキーワードにして企画した。

本稿は、2020年2月10日に実施した第6回フォーラム「宿泊の進化から考える『まちの当事者』は誰か？」の概要及び実施結果について報告するものである。

2. フォーラム概要

第6回フォーラムの概要は以下の通りである。本学の教職員・学生・一般を対象に、A4版フライヤー(印刷物2,000部・開催案内メールにPDFデータ添付)(図1)を用いて聴衆を募集し、講師(4名)及び運営関係者含む約90名で実施した。

(1) 実施日時

日時 2020年2月10日(月)16:30～19:00  
会場 北海道科学大学中央棟(E棟)4階E401  
主催 北海道科学大学、北海道科学大学北方地域社会研究所(RINC)  
後援 札幌市、手稲区、一般社団法人札幌観光協会、産学連携学会北海道支部

(2) 実施プログラム

16:30～ 開会(司会進行:梶谷崇,開会挨拶:木村尚仁)  
16:35～ 趣旨説明(企画担当:道尾淳子)  
16:45～ 基調講演①『宿泊施設を拠点とした地域連携の最新動向』(登壇者:嶋田洋平氏:一級建築士,一般社団法人日本まちやど協会理事,株式会社らいおん建築事務所代表取締役)  
17:25～ 基調講演②『メディア型ホテル「商店街HOTEL 講 大津百町」』(登壇者:岩佐十良氏:クリエイティブ・ディレクター,株式会社自遊人代表取締役)  
18:05～ 全体セッション「宿泊の進化から考える『まちの当事者』は誰か?」(登壇者:岩佐十良氏,嶋田洋平氏,清田純一郎氏:ちよい寝ホテル札幌手稲代表,株式会社清純堂代表取締役,矢野奨氏:クリエイティブ・ディレクター,commono株式会社代表取締役,道尾淳子)  
18:45～ 会場より質疑応答(質問用紙式)  
18:55～ 閉会挨拶(谷口尚弘)  
19:00 閉会

(3) 実施テーマ

RINCは、北海道はじめ北方圏の地域社会が抱える諸問題のうちコミュニティ再生及び地域活性化

\* 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科,北方地域社会研究所

\*\* 北海道科学大学工学部電気電子工学科,北方地域社会研究所

\*\*\* 北海道科学大学未来デザイン学部人間社会学科,北方地域社会研究所

に関わる課題を中心として、人材育成、地域文化、観光、持続可能な社会システムに関する研究を、域学連携（大学生や大学教員が地域の人々と一緒に地域の問題解決につながる実践活動を行う取組）を通じて推進している。これらの共通課題には「当事者意識の醸成」があり、このことの先駆的取組みとして捉えられる現代の滞在型観光の実践者を講師として招聘することにより学びを得る機会を考えた。当フォーラム企画書におけるテーマ趣旨は以下の通りである。

テーマ：共感・協育～当事者になる、当事者を巻き込む～

テーマ概要：滞在型観光の視点で、あなたの日常のまちを捉えてみましょう。連泊したいほど居心地がよく、また来たいと、あなた自身が思える「価値」を見いだすことはできますか。現代の宿泊施設の中には、昨今のまちの価値を惜しむに終わらせず、多数の人々を巻き込みながら、まちの一体感と役割連携で価値創造を行おうとするチャレンジがみられます。当フォーラムでは、実践者よりそのことを学び、まちの何らかの価値に、誰でも当事者意識を表すことのできる仕掛けについて考えます。



図1. フライヤー（A4両面印刷）

### 3. 趣旨説明

当フォーラムの全体進行は RINC 副所長・梶谷教授が行なった。RINC 所長・木村教授の開会挨拶の後、企画担当の本稿筆頭者・道尾講師より約 10 分間の趣旨説明を行った（図2）。

趣旨説明では、当フォーラムにおいて共有すべき用語「共感」「協育」「当事者」（図3）、「当事者意識」（図4）、「問題解決と価値創造の違い」（図5）について説明した。事例として、住民主導のまちづくりを実現する米国オレゴン州ポートランド市（1959年に札幌市と姉妹都市提携を結ぶ）、都市計画手法の一つ「プレイスメイキング」の概念、当事者意識を表明し得るまちの範囲として日本の伝統都市・宿場町や徒歩圏（半径 800m 圏）について概説した（図6）。



図2. 開会・趣旨説明・閉会の様子

#### 趣旨説明

共感・協育 ～当事者になる、当事者を巻き込む～

共感（sympathyの訳語）

他人の体験する感情や心的状態、あるいは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。同感。

協育（「協働して育む」という言葉を短くした造語）

複数の主体が共通の目的や課題を持ち、対等に利益を得るとともに、対等に責任を負う関係で活動に取り組むこと。

当事者（日本語の持つ主格的な意味を示す適当な英訳はない）

その事柄に直接関係している人。ニーズの帰属する主体。

図3. 共感・協育・当事者

当事者意識（自分が持つもの、他者に持てと言われても…）

その事柄に自分が直接関係すると分かっていること。関係者であるという自覚があること。

自分事であって他人事ではない。主体性がある。結果に対して責任が伴う。



私は、私の街に対して当事者意識を表明できる？  
誰が受け皿か？パブリックコメントの機会？本当に変わる？

図4. 当事者意識

#### 問題解決と価値創造

『創造すること』と『問題を処理すること』の根本的な違いは簡単である。問題を処理する場合、私達は「望んでいないこと」を取り除こうとする。一方、創造する場合は、「**本当に大切にしていること**」を存在させようとする。これ以上に根本的な違いはほとんどない。

ピーター・M・センゲ（1947-）

SoL創設者、マサチューセッツ工科大学上級講師



『The Fifth Discipline』  
(Doubleday Business) 1990



『学習する組織』  
(英治出版) 2011



出典: <https://scrapbox.io/>

図5. 問題解決と価値創造の違い

† 北海道科学大学工学部建築学科，北方地域社会研究所，研究推進・地域連携センター長

†† 北海道科学大学全学共通教育部，北方地域社会研究所

††† 北海道科学大学保険医療学部看護学科，北方地域社会研究所



図6. 事例紹介スライド（一部）

#### 4. 基調講演①

基調講演の1題目は、嶋田洋平氏による『宿泊施設を拠点とした地域連携の最新動向』である。嶋田氏らの福岡県北九州市小倉における実践例や「まちやど」の概念などについて約40分間お話をいただいた（図7）。



図7. 基調講演① 嶋田洋平氏

嶋田氏は北九州市内に古くからある既存商店街「旦過市場」の小さなエリア再生から活動をスタートさせた。建築家として建物所有者とリノベーションを行うだけではなく、現地住民や外部の人を交えて実際の空き物件を計画するリノベーションスクールを6年間実践した。まずはエリア内の複数の不動産やまちの共有空間である街路のあり方について提案し、エリア全体の価値を持続的に高める事業を行い、まちに来訪する人を増やすことに成功した。また、まちに人々が宿泊滞在できるよう、交流拠点となるドミトリー形式のホテル「TangaTable（タンガテーブル）」もオープンさせた。宿泊や観光とは無縁のまちであったにも関わらず、宿泊施設実現に至るきっかけは、リノベーションスクールで描かれた一枚のアイデアスケッチだったという。このような地域の小さな再開発を通じて住民に最も喜ばれたことは、まちの祭のコミュニティが再生したことだと語った。

嶋田氏が理事を務める「日本まちやど協会」は、まちの既存の資源をうまく活用して、それらをまちの中で繋ぎ合わせ、新たな事業を興している関係者らの団体である。協会による「まちやど」の定義は「まちを一つの宿と見立て宿泊施設

と地域の日常をネットワークさせ、まちぐるみで宿泊客をもてなすことで地域価値を向上していく事業」のことである。実体験も交えて紹介されたのは、イタリアの「Albergo Diffuso（アルベルゴディフーゾ）」である。これは、今日一般的なホテルと違い、エリアの中に宿泊施設が分散し、まち全体を一つのホテルと見立てている特徴がある。かつて発展した近代日本の宿場町と同じ形式であり、旅人はまちまちを巡って旅を続けるうちに、まちというのは一つとして同じものがないことの気付きも得ることができる。現代版まちやどの事例として、職人に会いに行くがテーマの富山県南砺市井波「BED AND CRAFT」、観光地ではないまちの小さな店々を心地良く過ごす香川県高松市仏生山「仏生山まちぐるみ旅館」、ディープな日常を味わう楽しみを提供する広島県福島市伏見町「AREA INN FUSHIMICHO FUKUYAMA CASTLE SIDE」が紹介された。『人口減少する日本の地方都市は「何もない」からどうしようもないのではなく、どのまちにも既にある日常を「空間資源としての本物」としてどのように捉えて使っていくのかということこそ重要ではないか』というまとめがされた。

#### 5. 基調講演②

基調講演の2題目は、岩佐十良氏（株式会社自遊人 代表取締役）による『メディア型ホテル「商店街HOTEL 講 大津百町」』である。地方の潜在的な観光資源をどのようにプロデュースし、本物に対する体験や感動を伝えていくか、産業を創造していくかについて、同じく約40分間お話をいただいた（図8）。



図8. 基調講演② 岩佐十良氏

「メディア型ホテル」とは、「〃街に泊まって、食べて、飲んで、買って〃。雑誌を読むかわりに街を歩く、テレビを見るかわりにお店の人と話してみる……。雑誌やテレビ、インターネットでは得ることができない”リアルな体験”をテーマにしたホテルのこと」であり、岩佐氏らが提唱する宿泊施設の一つの姿である。岩佐氏は新潟県南魚沼市にて雑誌メディア『自遊人』の編集を20年間行っているが、そもそも米作りを学ぶために東京都より移住している。2014年オープンの「里山十帖」はメディア型ホテルの実践第一号で、体験型の宿と称されるが、実際には宿泊者向けに数多くのイベントを行ない、田植えや稲刈りだけではないお米というメディアを宿泊者に体感してもらって

いるという、様々な食材には旬や産地があること、食材にはそれを育む環境があること、宿泊施設の企画運営を通じて、地域の当たり前を人々に伝えようとしている。『この風景やこの食文化を守りたい、声を高く上げれば上げるほど人には伝わらない。何となくそうだよ、何となく感じてもらう。それがメディア型ホテルの根本的なところ。』と語った。大変印象的な言葉であった。

「商店街 HOTEL 講 大津百町」は、東海道宿場町の歴史あるエリアにあるが、近年商店街の衰退が著しく、文化財に相当しなくても古き良き民家が失われている現状がある。地元工務店と、時間とお金をかけて遊休物件7棟を良質な宿泊施設として再生させ、滞在型観光拠点としてコンテンツ勝負の企画運営が行われている。滋賀県全体は文化財等歴史遺産の宝庫であるにもかかわらず、全国統計的なまちの魅力度で言うと下位常連で観光地としての認知が低い。メディア型ホテルをコンセプトとした宿泊施設が地方の潜在的観光資源をプロデュースし、地元の雇用を生み、都市に住む人を集客する。これにより、都市に住む人はその地域の資源に発見や感動、本物の贅沢を感じ、地元住民はふるさとへの自信や新しい産業を創造する。人と人の交流の中で生み出されるものにはきっかけと持続性に対する仕掛けが必要であり、そこに宿泊施設やメディアの役割が語られた。

## 6. 全体セッション

約40分間の全体セッションでは、基調講演の岩佐氏、嶋田氏に交えて、手稲エリアに宿泊施設「ちよい寝ホテル札幌手稲」を開業した清田純一郎氏と、札幌市内・近郊の宿泊施設のブランディングやWebデザインを行う矢野奨氏、コーディネーターに道尾講師が登壇し、今回のキーワード「まちの当事者」「共感・協育」についてディスカッションした(図9)。



図9. 清田純一郎氏(左)・矢野奨氏(右)

まず、清田氏と矢野氏の仕事について紹介いただいた(図10)。清田氏は、脱サラして清田氏の地元である手稲に2018年、宿泊施設を開業した。手稲は手稲山を有するスキーリゾートであるが、宿泊施設はほとんどない。清田氏自身は地元と言っても青年期以降の地域との接点がなく、地域の社である「手稲神社」の祭事を手伝うことから人脈

を探ったと言う。手稲エリアの魅力再評価すると、鉄道・鉱山・スキー・オリンピックの歴史、手稲山麓の自然と石狩湾、前田森林公園や緑道など、地元民ですら認識の薄れている資源が多くある。手稲に通学する大学生にも地域の魅力を知って欲しいと語った。

矢野氏は、宿泊施設における新しいビジネスモデルとして、Webサービスを中心としたブランディング全般を提案している。事例紹介では、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会が指定管理を行うキャンプ場「札幌市定山溪自然の村」と、合同会社ステイリンクが札幌と小樽で運営する「THE APARTMENT HOTELS」のWebデザインについて、現在公開中のWebサイトを用いて解説された。



図10. 清田純一郎氏(左)・矢野奨氏(右)

次に、全体ディスカッションでは下記3つの問いを用意した。①「それぞれの事例では『まちの当事者』をどのように捉えることができますか?」、②「それぞれの事例では『共感・協育』をどのように捉えることができますか?」、③「(現在、共有された仕組みのない中で)手稲エリアの価値創造についてどのように考えますか?」。また、会場からの質疑応答は質問用紙にて2件抽出して紹介した。④『メディア型ホテルやまちやどをやれると判断するポイントは何ですか?どこの町でもやれるのでしょうか?』、⑤『現代に、歴史的で伝統的なものに着目して行動し続けるモチベーションは何ですか?』。

活発な議論の中で後半には、どのまちにおいても価値創造はし得るが、その場所にある本質や何のために行うのかという根本が共有でき、リスクを負うことのできる人と一緒に進めていくことが大切ではないかというまとめがあった。

## 7. まとめ

おわりに、本学研究推進・地域連携センター長の谷口教授より閉会挨拶があり(図2)、150分間のフォーラムが終了した。当フォーラムでは滞在型観光の視点に着目した。このことは、観光・宿泊業向けの発想に留まらず、身近なまちの、ありふれた日常にある潜在的価値を基盤に行う「まちづくり」に対しても、多くの気付きをもたらすのである。当フォーラムの全体は、今後記録集としてデザイン編集し情報公開する予定である。現時点、各種コンテンツを調整中であることを現状報告とて結びとしたい。